体育原理論批評¹

佐々木 究 (山形大学)²

Abstract

This paper is to review discussions that try to answer the question ‘what is physical education?’, especially the ones after WW II. And this is to classify them from a certain point of view for pointing out a blind spot on that studies.

We can see many discussions concerned with the issue of the identity of physical education, which have defined it in various meanings. So, we refer to some frame works proposed in the past for surveying them, and extract assertions which justify their definition of physical education from one of discussions in each type. By fixing these assertions as a new frame work to classify, the all discussion is categorized. Finally, we derive some difficulties of the study from the characteristic of discussions in each classes, and point out an incomplete part in common which the discussions in question have necessarily.

‘Physical education’ is used in various meanings according to historical and social contexts. But in the discussions, a certain meaning being justified, the other meanings are considered inappropriate. Histories of physical education have typically described from this standpoint ; based on his meanings which had been defined previously. In these cases, it is difficult to see ‘physical education’ in another meaning. This is why, historical problems of individual facts, for example, how physical education was grasped in a certain age or society, have been failed to see. This is the blind spot on the philosophical study of physical education, which we wanted to point out.

Keywords: classify, define, the blind spot on the philosophical study

キーワード：分類する, 定義 (する), 哲学研究上の盲点

¹ A critical review on fundamental principle of physical education

² Kyu SASAKI, Yamagata University, Faculty of Education Art and Science 4-12, Kojirakawa-machi, 1-chome, Yamagata, Yamagata, Japan, 990-8560

はじめに

体育とはなにか?という問いを巡る議論がある。本稿は、とくに戦後以降に行われたそれらの議論を広く参照し、その主張内容を一定の観点から整理するとともに、そうした議論において見過ごされる研究上の盲点を指摘しようとするものである。

体育とはなにか?という問いは、体育諸科学では、とくに人文社会科学領域での議論において手続き的に提示され、研究の枠組みとして一定の定義が与えられることがある。今、体育とはなにか?という問いを巡る議論のうち、体育の自己同一性を定立することに主題的に取り組んでいる著作を体育原理論と呼ぶとすると、同じ問いかけをしているものの中にも、これとは異なる方向性を持つものがある¹⁾。たとえば、主な関心が「人間形成」といった他の主題に注がれているものなどである²⁾。本稿で主に参照したいのは、体育原理論であり、これまでに提出されてきた議論を俯瞰してその主張内容を整理することが第一の目的である。

そのための手続きは、次のようである。すなわち、体育原理論でも体育についてはやはり何らかの定義が行われている。そしてこれまでに既に、主張内容に即して、様々な枠組みによる分類が試みられてきている。そこで最初に、これら先行する枠組みを参照しつつ、各議論を整理・分類する。次に、それぞれの類型において代表的な議論に着目して、他ならぬその意義が体育の定義として正当化される論拠となる主張を抽出する。そのうえで、これを新たな分類枠組みとして設定し、他の体育原理論を再分類する。そして最後に、本稿の第二の目的として、抽出された根拠に着目して、その特性から必然的に見落とされる研究上の盲点を指摘する。

なお、やや印象論に傾くが、体育とはなにか?という問いが活性化するのは戦後以降と見られ³⁾、さしあたり、本稿での検討の対象はこの時期以

降の議論に限定する⁴⁾。また、作業上の限界として、参照の対象となる著作は筆者が実見できたものに限定される。さらに、複数の著作を残している著者もあり、この場合は代表的なものを一つ採り上げることにする。本稿の議論は、以上のような制限の上で進められる。

1. さまざまな定義の試み

体育とはなにか、という問いに対しては、これまでに多くの解答が試みられており、しかも、その主張の内容はさまざまである。大橋らは⁵⁾、国内外の論者を列挙し、その知見を整理しているが、それによれば彼らの体育理解に一定の共通性はあるものの、それぞれ固有の主張を展開していることが確認できる。

また、こうした多様な主張を整理するための分類枠組みもさまざまに工夫されている。たとえば友添は⁶⁾、時系列的な観点から「体育の理念的変遷」を整理し、①「身体教育」②「運動による教育」③「運動の教育」という三段階の歴史的変遷を見ている。丹下も⁷⁾、同様に歴史的な変遷を認め、①「身体教育」②「身体活動を通しての全人教育」を指摘しつつ、最後に、自身の主張として③「運動文化による人間形成」を付加している。友添の問題関心と、丹下の思想史的地位からして、以上二つの分類枠組みはほぼ重なるものと見られる。また中澤は⁸⁾、スポーツと学校教育との結びつきに対する関心から独自の分類を試みており、①「身体形成論的図式」②「人格形成論的図式」③「スポーツ文化論的図式」を挙げている。この分類については、論者自身によって前二者との相同性が認められている。

一方、歴史学的観点から木下は⁹⁾、明治期における体育の概念形成過程に着目して、体育の意味内容について、①「身体のための教育」②その亜流である「運動を手段とした身体教育」③運動を手段とした多目的な教育である「運動

教育」④「運動そのもの」を見出した。木下の①②は、身体を育成しようとする「目的論的規定」であるという共通特性があり、前三者の①と重なるものがある。また、④は、教育性を脱落させた独特の意味内容であり、この点では前三者の分類とは異なっているが、「運動」「スポーツ」といった要件が浮上している事実に着目すれば、この四項目による実証的な分類も、上記三区分の基準と通ずるものがあるだろう。いずれ、体育にさまざまな定義づけが行われているとしても、内容的な観点から一定の整理が試みられてきたのである。

まずは、以上の議論を参考に、①身体そのものの育成を求める「身体教育」、②人格など身体以外に価値の実現を求める「身体を通しての教育」、③「運動・スポーツ」ないし「スポーツ教育」、という分類枠組みを仮設して、戦後以降の我が国における体育原理論を整理する。著者名と『 』内に著書名を挙げ、出版年は初版のものを記載したが、著者実見の版が異なる場合には両者を並記した。記載順は、各類型ごとに初版が発行された年代順である。

①身体教育

城丸章夫『体育と人格形成』1980 青木書店
佐藤臣彦『身体教育を哲学する』1993 北樹出版

②身体を通しての教育

前川峯雄『体育学原論』1958 中山書店
出口林次郎『改訂増補 体育学原論』1965 東洋館出版社
石津誠『体育原理』1969 道と書院
篠田基行『体育思想史』1980 逍遙書院
永井康宏『体育原論』1983 不昧堂出版
阿部忍『体育の哲学的探究』1985／1984 道と書院
川村英男『改訂 体育原理』1990／1985 杏林書院

③運動・スポーツないしスポーツ教育

高部岩雄『体育学原論』1962 逍遙書院
丹下保夫『体育技術と運動文化』1965 明治図書

本稿で採り上げるのは以上の著作であるが、ただし、複合的な主張をするものもあり、たとえば城丸は、体育に「文化としてのスポーツの基礎の学習と、身体の全面的発達のための基礎的形成との二重の目的」を指摘して、①に加えて③の内容をも重層的に許容している¹⁰⁾。また丹下は、「運動文化を学習することが実は人間形成」であるとして¹¹⁾、②と③にまたがる主張を展開している。概して、副次的に他の類型における目的性をも達成する可能性があることは排除されることはなく、そうした観点からすれば、このような分類は便宜的なものにとどまるだろう。これまでのところ、じつに多彩な議論が並び立っており、定義の内容的な多様性に捕らわれるなら、そもそも類型化すること自体が困難であるようにも思える。

ともあれ、このような状況において、上述の論者たちは、どのようにみずからの定義の正当性を主張しえているのだろうか。定義を一義的に提出するからには、少なくとも主観的には合理的な、なんらかの論拠が必要ではないだろうか。そしてそれは、主張の正当性を支えることの表裏として、異なる主張を排除するものでもあるだろう。項を改めて検討する。

2. それぞれの論拠

体育に関する定義が未確定のなかで、あえて一義的な解答を求めるならば、内実に先だってそれを正当化する論拠こそが問われる必要がある。各論者において体育の定義はどのような根拠に基づいて提示されているのか。前項で挙げた著作を対象に具体的に見ていくことにしたいが、ただし、そうした論拠を明示しない著作も

あり、まずは各類型において典型的な論拠を持つものを採り上げていくこととする。

2.1 「身体教育」の論理

この類型では、佐藤の『身体教育を哲学する』を挙げることにする。

佐藤の議論の立ち位置については、「体育をスポーツと切り離し、教育の一部として」位置づけるもの¹²⁾、また、体育が「翻訳語として成立した」という事実に立ち戻って、「『身体』の対象性を明示した」議論であるといった指摘があり¹³⁾、前項の類型における①「身体教育」に該当するものと思われる。

この立場を正当化する根拠として注目されるのが、体育の「原義」についての理解であり、著作の冒頭での次のような言及である。

本書は、「体育」をその原義である「身体教育」として、哲学の立場からその概念的把握を企図するものであって、いわば「体育哲学」の試みである（傍点引用者）¹⁴⁾。

体育の同一的で普遍的な意味を求める佐藤は¹⁵⁾、「原義」である「身体教育」を立脚点として、議論を始めようとしている。佐藤は、歴史的な事実として「体育」が「身体教育」として出来たことを認め、自身の議論がその意義に立つものであることを明らかにしている。

また、他の箇所では佐藤は、体育を「もともとの意味内容である『身体教育』として理解しようとする」立場を「正統派的立場」とし¹⁶⁾、そうした原義に基づく「身体教育」としての体育を「正統的『体育概念』」などと呼んで¹⁷⁾、その含意に対する特権性を認めている。著者にとって、「体育」が多義性を帯びる現状は望ましいものではなく、この用語が成立した際に帯びていた最初の意義こそが正当なものである。佐藤は、歴史的な先行性にそのまま自らの立場の正当性を求めている。

2.2 「身体を通しての教育」の論理

この類型では前川峯雄の議論を採り上げる。前川は、体育について「スポーツをも含めた“身体活動”を“physical”というように考え、この活動による教育が、まさに、体育である」と述べている¹⁸⁾。そして、その目的を、教育一般のそれと一致した、「もっとも満足な、もっとも幸福な、もっとも健康な生活」の実現に求めている¹⁹⁾。体育は、身体活動を媒介とする教育の一分野であり、「身体活動による、またはそれを通してなされる教育」と捉えられている²⁰⁾。

前川は、体育という用語が明治初期に欧米からの輸入によって成立した事実を認め、しかも、この語が指し示すべき「体育の事実」が時代とともに変化していることをも指摘する²¹⁾。しかし、その上で彼が採るのは、佐藤とは反対に、「現実」における意義である。前川は、それまでの先行する議論を参照した上で、総括的に次のように述べている。

しかし、深く考えてみると、以上のような規定をもってしては、必ずしも、われわれが現実にもみどころの体育を正しく現しているとはいえない。何となれば、体育において行われる学習者の反応は、身体的なものではなくして、むしろ“全人”としての反応である（傍点引用者）²²⁾。

前川は、体育における「体」の含意を探求して、諸家の見解を検証している。「以上のような規定」というのはそうした諸家の見解を指し、「現実」に照らしたとき、そうした見解を受け入れることはできないとするのである。前川においては、概念規定の妥当性は「現実」のあり方を正しく捉えられているかどうかという点にかかっており²³⁾、体育の正当性を担保する最終的な審級は、言うところの「現実」に求められている。

2.3 「運動・スポーツないしスポーツ教育」の論理

この類型では、高部岩雄を取り上げる。高部は、体育の原義として「教育」概念を認めている（ただし、「身体をとおしての教育」としての含意）。しかし現状において、体育がある種の「濫用状態」にあり、教育の意義を越え出ていることをも指摘する²⁴⁾。その上で著者は、体育の「公約数」を「身体運動」に求め、これを体育の定義とするのである。この間の経緯について高部は次のように述べている。

体育の概念は、現在、そこまで拡大している。いや、体育の概念はもともと、教育に対する即自性があったのだが、現実の現象が、その枠を突き破ってしまったのである。したがって、それを語義どおり、教育の枠内に押しこめようと思えば、よほどの自制ときょうくつさが要求されようが、それは、かなりむずかしいことと云わねばならぬ（傍点引用者）²⁵⁾。

高部の論理を整理すれば次のようになるだろう。すなわち、現状において体育は多義化しており、もはや教育という枠組みに留まっていない。一方、そうした多様化した意義の「公約数」を求めれば「身体運動」がそれにあたる。したがってこの「身体運動」が、体育の定義として妥当である²⁶⁾。高部において、定義は現状を追認するものであり、体育の「現実」への適合性のみによってその妥当性は保証されている。つまり、高部においても定義を根拠づける最終的な審級は、「濫用状態」にあるともされる「現実」ということになる。

以上、各類型の代表的な議論を参照して、それぞれの立場を正当化する論理の抽出を試みた。参照の事例は少ないものの、上で見出された根拠に関しては、一定の傾向が認められるよ

うに思われる。すなわち、1) 体育という語の「原義」に遡るもの、2) その後の多義化の過程を前提に「現状」を追認しようとするもの、という二つの立場があるように見えるのである。1) には佐藤の議論が、2) には前川や高部の議論がそれぞれ該当するだろう。引き続き次項では、この二区分を踏まえつつ、他の著作についても参照・整理してみたい。

3. 整理と再分類

行論の先取りになるが、実は、1) 「原義」に根拠を求める議論は佐藤を除くとほとんど認められず、2) 「現状」に最終的な審級を認めるものが多く見出される。また、前述のようにいくつかの著作では根拠自体が明示されていないので、本項では、残りの著作については、まずは根拠の有無に着目して整理・分類する。

3.1 根拠が言及されているもの

3.1.1 城丸章夫（①身体的教育）

城丸は、自身の著作において、可能な限り「体育・スポーツ」という表記を用いることを宣言し、その意図が、「学校教育をもふくむ全スポーツ活動を指す」ことにあると明らかにする²⁷⁾。その上で、とくに「学校教育」を指す際には「体育」とし、「文化ジャンル」を指すときは「スポーツ」として、両者を呼び分けることとしている²⁸⁾。こうした表記上の配慮が必要なのは、次のような事情があるからである。

「体育」ということばは、もともとは、身体的教育ということからきていると思うのだが、現実のこのことばの使い方は、しばしば「スポーツ」と同一の意味で使われている²⁹⁾。

そもそも城丸自身は、上で述べたように「体育」と「スポーツ」を「同義ではない」として両者を区別しようとしている。しかし、「現実」

の用法において誤解を生じる恐れがあり、両者を連記することとするのである。こうした配慮によって、城丸における「体育」の意義は、上に挙げた本来の意図から外れて、「教育活動としての目的を強くもったスポーツ指導」へと局限されることになる³⁰⁾。城丸によれば、「現実」において「体育」と「スポーツ」は同義的に捉えられており、これに対応した用法が選択されねばならない。

3.1.2 出口林次郎 (②身体を通しての教育)

出口は、体育を「as a means of education through physical activities となす一派の見解を妥当なものとする」として、自らの見解がこれに立脚するものであることを明らかにしている³¹⁾。具体的な内実としては、「身体の健全を計ると同時に、精神の教育鍛錬を实践を通じて体得せしめ」、もって「円満なる人格の完成」に与るものである³²⁾。

この規定に先だって出口は、体育の本来的な意義が「体を丈夫にすればよい」とするもの、あるいは「健康な体を作ること」を企図した営みであったことを認めつつ、これを「体育の一手段に過ぎない大筋肉活動をもって全体を理解したものとする極論」として斥けている³³⁾。出口によれば、体育の意義は、「社会の動き」や「時代の影響」によって変遷してきたのであり³⁴⁾、「体を丈夫に」するといった限定的な意義は、もはや「今日では人の容れないところ」となっている³⁵⁾。「現在の民主主義教育の情勢下において、大筋肉活動をもって体育のすべてであるとする見解」(傍点引用者)はすでに「無謀」なのであり³⁶⁾、こうした「現在」のあり方に照らしたとき、体育は、上に挙げたような意義で捉えられるべきであるとするのである。

3.1.3 篠田基行 (②身体を通しての教育)

篠田は、体育を、「健康な身体の育成と性格の陶冶にかかわる教育的活動」と解しており³⁷⁾、

さらに、次のように規定している。

体育とは最も人間的 (more human) な身体的行為であり、組織的な身体活動を直接の媒介としてなされる意図的活動であり、人間天賦の権利たる個人の生命、自由および幸福の追求に貢献する活動である³⁸⁾。

篠田は、体育が、「身体そのものをつくる教育」から「身体活動を通しての人間形成」へと変遷してきたことを認め³⁹⁾、今後も「その意味領域は拡大」していくべきものと見ている⁴⁰⁾。その上で篠田は、これまでの定義においてなお「不足」の部分があることを指摘し、それを補うべく、上の定義を定立するのである。その背景には、「ますます多様化し複雑化していく現代社会に対応」するために、「体育は絶えず概念の再構成と検討が迫られて」いるとの理解がある。

篠田におけるこのような議論の展開の起点には「広辞苑」の記述が置かれている。篠田が要約するところによれば、その内実は「身体活動」を通して、「健康な身体」を実現するだけでなく、さらに「人格の形成」にも貢献するものである⁴¹⁾。篠田は、こうした内容を妥当と見て次のように述べている。

定義の基本原則に照らして広辞苑にある体育の説明をみれば、それは定義の本質を満たし、かつまた現代体育の意味も満たしている表現であることがわかる (傍点引用者)⁴²⁾。

「定義の基本原則」とは、「類概念」と「種概念」による複合的な定義方法を指し、篠田は、「広辞苑」の記述がこの原則に適合していることを認めている。その上で、その内実が、言うところの「現代体育」のそれを充足していることをも評価するのである。篠田において定義の妥当性を定める最後の審級は「現代体育の意味」に求められている。

3.1.4 永井康宏（②身体を通しての教育）

永井において体育は、「身体運動（運動実践）を通じての人間形成の作用」と捉えられており⁴³⁾、その上で、広狭二つの定義が試みられている。一方は「意図的、計画的に行われる」もので、学校体育がその「典型的」なものである。他方は、「運動（実践）による人間形成の事実（体育的事実）のすべてを含む」もので、学校体育および社会体育を包含する⁴⁴⁾。

これに先だって永井は、現状での「体育」が「身体活動」や「スポーツ」などと同義的に用いられている事態を指摘し、その上で、本来の体育には何らかの「価値」の実現や「意図」の働きがあり、それによって「単に身体を動かして運動を行うこと」と区別されるとの見解を示している⁴⁵⁾。次のように述べている。

体育ということは、少なくとも、運動の効果に関するもの、いいかえれば、運動を行なうことによって、価値を実現するとか、何かよい結果が得られるようにするとかいう意図が働いているもののようには考えられる。また、そのように、一般に考えられてきているようにも思う⁴⁶⁾。

永井において体育は、「運動」との類種関係において理解されている。ただし、運動の様態や人々がそれから受ける影響は多様であり⁴⁷⁾、そのうちでとくに肯定的な価値の実現に与るもののみが体育に該当するとされる。そして自らの主張をさらに正当化すべく、ここで「一般に」もそのように理解されているとの見解を示している。永井による正当化の根拠には、当代における「一般」的な理解がある。

3.2 根拠が言及されていないもの

最後に、明確な根拠が示されていない著作を概観しておく。いずれも先行する議論を参照しているが、選択の根拠や妥当性についての自己

言及的な記述は見出されていない。

3.2.1 石津誠（②身体を通しての教育）

石津は体育を「教育」の一端として捉え、「人間形成への実践」と規定する⁴⁸⁾。石津によれば体育は、単なる「筋肉運動学習」や「身体的学習」などではなく、「全人格陶冶をめざし、人格の完成を企図する営為」である⁴⁹⁾。

「体育の直接の対象」は、もちろん「身体」であり⁵⁰⁾、スポーツの「技術習得」などは体育における「学習の中心」と認められている⁵¹⁾。ただし、その究極的な目的は、「内面に展開される人間そのものの向上」にあり、「心身が一体となって開発」されるべきである⁵²⁾。体育は、他の教育的営みの「足場」や「手段」などではなく、「全一的な活動の中に知、徳、体を渾然一体とした教育活動」がある、それ自体として「絶対的価値を有する」営みなのである⁵³⁾。

こうした石津の規定は、「人間全体を生々澆刺たる生活の相の下で、総合的にとらえなければならぬ」という問題意識に基づいている⁵⁴⁾。体育は、現代の諸科学の分化傾向に追従するのではなく、その知見を吸収しつつも「統合的な人間教育としての実践の本質を失わずに、実際の真理の把握に向かって進むべき」というのである⁵⁵⁾。石津によれば体育は「総合的人間の解明」に立脚するのであって⁵⁶⁾、教育一般とともに人格形成に貢献すべきものである。しかし、こうした人間形成としての体育という理解には根拠が明示されることはなく、彼の議論では、いわば先験的な位置にある。

3.2.2 阿部忍（②身体を通しての教育）

阿部は体育を次のように定義する。すなわち、「体育とは身体活動を媒介としての、健康な身体と好ましい社会的性格との同時的育成を目指す教育である⁵⁷⁾」。この規定には、著者自身が認めるとおり、「身体教育」と「身体を通しての教育」との複合的な含意がある。

阿部による規定は、先行する論者の見解を参照した上で提案されたものである。しかし阿部は、それらの見解を「無視は出来ない」ものの「う呑み」にもしないとして、自らの定義を提示するのである。というのは、「時代の推移にともない、歴史的社会的現実とは刻々と変化し」ており、「この変化に対応出来るような新たな体育の本質を、絶えず疑問を發しながら追求していかなければならない」と考えるからである⁵⁸⁾。したがって上の定義も、いわば暫定的なものに留まるであろう。しかし、他ならぬこの定義を正当化する論拠は不明なままである。

3.2.3 川村英男 (②身体を通しての教育)

川村において体育は、「スポーツその他の運動が人間に及ぼす好ましい影響（効果・価値・意味など）を期待して行う活動」と規定されている⁵⁹⁾。川村は、体育とスポーツが「密接な関係」にあり、用語としてしばしば「混用」されている事実を認め、しかも、ある事情において、それを好ましくない事態であると見る。次のように述べている。

外国では“体育”を“スポーツ”に包括しようとする試みがあるとときが、いわゆる今日のスポーツの一面をみると、これに“体育”を包みこんでいくことには、直ちに賛成しえないものがある⁶⁰⁾。

川村によれば、体育とスポーツに関しては「両者の異同をめぐっての論議」が行われているが、これらは本来、互いに異なる概念である。そこで、上述のような定義を自ら明らかにするのだが、その根拠と見られるのが、ここで言う「今日のスポーツの一面」である。しかしその具体的な内実が不明であるだけでなく、スポーツに関する言及からこのような体育の定義が導かれることの論理も不明のままである。

3.2.4 丹下保夫 (③運動・スポーツないしスポーツの教育)

丹下は、体育を次のように捉えている。「運動文化を学習することが実は体育における人間形成であり、体育の本質と考えるべきであろう⁶¹⁾」。ここで言う「運動文化」とは、「社会の発展とともに人間がつくり、発展させてきた」ものであり、スポーツやダンス、体操などが含まれる。丹下によれば、たとえばスポーツは「知的な作戦」や「フェアプレーの精神」などといった特性を有しており、したがって、勝利を目指す営みにおいても、体力や技術だけでなく、「スポーツマンとしての精神的態度」なども形成される。「運動文化」はその「特性」によって、これに関わる人間の能力を発達させてきたものと理解されている⁶²⁾。

また丹下は、昭和22年、33年の学習指導要領などを参照しながら⁶³⁾、体育（科）の役割が人間形成にあるのか、それとも体力育成にあるのかといった問いが生じていることを指摘する。その上で、従前の議論が「運動を通して」という立場を採っていると見て、これを批判する。それは、「国家権力」や「道德教育」などのための「手段」としてのみ体育を位置づけることになるからである⁶⁴⁾。そこで、丹下は体育に固有の立場を求めて、上記のような提案をするのである。しかし残念ながら、体育の自己同一性の所在を、他ならぬ「運動文化を学習すること」に認めることの根拠は明示されていない。

以上の検討を踏まえて、第一項で挙げた著作を定義の「根拠」に基づいて再び整理すると次のようになる。

I. 「原義」に基づくもの

佐藤臣彦『身体教育を哲学する』1993

II. 「現状」に基づくもの

前川峯雄『体育学原論』1958
高部岩雄『体育学原論』1962
出口林次郎『改訂増補 体育学原論』1965
篠田基行『体育思想史』1980
城丸章夫『体育と人格形成』1980
永井康宏『体育原論』1983

Ⅲ. 根拠が不明のもの

丹下保夫『体育技術と運動文化』1965
石津誠『体育原理』1969
阿部忍『体育の哲学的探究』1985/1984
川村英男『改訂 体育原理』1990/1985

以上である。

4. 議論の盲点

これらの著作においては、根拠が明示されていないものはもちろん、じつは根拠が示されている主張についても、そのことによって正当性は十分に保証されない、というのは、そうした根拠はいずれも先験的な設定と見られ、したがって論理内在的にその妥当性を検証することが困難だからである。体育の定義は、根拠によって支持されるとしても、その根拠自体の正当性については別途検証されなければならない。体育原理論が事後的に検証されるべき所以である⁶⁵⁾。しかし、こうした難問よりも具体的で、かつ体育学的に問題性のある事態が、これらの議論には伏在しているように思われる。順に見ていくことにしたい。

最初に、「原義」に正当性を求める議論である。これには佐藤の著作が該当した。前掲木下の考証によれば、そもそも「体育」の成立は明治期に求められ、当時の「体育」には、「身体」そのものを育成しようという意図を持った「教育」という意義が認められている。こうした歴史的事実に基づけば、最初期の用例に一定のプライオリティ priority を認め、それ以降のさまざま

な意義がある種の「歪み」と見なすことは可能であるかもしれない。時間的な先行性に正当性の根拠を求めるのがこの立場だからである。

しかし、「体育」の成立にはさらなる前史があるだろう。前掲木下や樋口が指摘するように⁶⁶⁾、我が国の体育は欧米からの移入によって成立したと考えられるからである。事実、「体育」の成立に関しては、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) のいわゆる三育的な主張を持つ著作が原典として参照され、彼の「physical education」が「身体」の育成を企図するものであるとの見解も示されている⁶⁷⁾。我が国での体育はこれを引き写すことで成立を見たのであり、彼の主張内容はその祖型と見ることができる。しかし既に指摘されているように、「体育」という用語にはスペンサー以前におよそ100年の前史がある⁶⁸⁾。ならば、「体育」の歴史は、明治期やスペンサーを越えて、さらに遡及されねばならない。そしてもし、用語の歴史がさらに遡られうるならば、19世紀半ば以降における「体育」の意義に特権的な正当性を認めることは難しいことになる。他の意義が先行している可能性が残されているからである。

「原義」に正当性を求める見解は、スペンサー以前の体育の歴史を視野から除くことではじめて成り立つのであり、現状では、恣意的な設定であるとの批判を免れることができない。遡及されるべき欧米での体育 (physical education など) の意義はこれまでのところ十分に検証されておらず⁶⁹⁾、以前の体育が「身体」の育成を意図する教育を含意するかどうかは明らかになっていないからである。

次に、「現状」に根拠を求める議論を見ていく。比較的多くの論者がこの立場を採っていたが、共通に認められる不首尾として、根拠となる「現状」がそもそもどのような事態であるかが十分に言及されていない、ということがある。たとえば、前述のように前川は「現実」にみるところ

の体育」に言及しているが⁷⁰⁾、それがどのように一義性を担保しうるものなのか十分に明らかにしていない。もちろん、著作の出版当時には読者との間に共通理解が成立していた可能性もあるが、少なくとも2010年代現在では、言うところの「現実」の内実を行論から読み取することは難しい。そして著作の論理を辿る限りでは、これを抽出するために採用されたであろう方法論的な手続きも不明なままである。このような場合、指摘されている「現実」には、著者自身の「体育」観が素朴に投影されている可能性があり、これに対してはどんな正当性も付与することはできない。彼らの定義の根拠にあるのは、結局のところ、彼ら自身の「体育」観ということになり、いわば同語反復的である可能性が拭えないからである。

なお蛇足ながら、第三の立場すなわち根拠が明示されていない議論については、「現実」に根拠を求める議論以上に、著者の思いなしに基づくものとの批判を免れることはできない。もちろん、そうした規定自体には新たな体育概念の提案として積極的に捉えられるべきものがあるかもしれないが、それが体育として定立されるべき論拠が不明であることに変わりはない。

以上、三つの立場に固有の困難を指摘したが、さらに、いずれの立場にも共通する難しい問題がある。それは、体育を一義的に規定しようとする立場に必然的に伴うものであり、体育原理論においても散見される歴史的叙述に関わっている⁷¹⁾。

そもそも定義を一義的に定める場合、原理的に、他のすべての意義は不当と見なされる。たとえば、「原義」を正当とする立場では、明治期以前に「体育」は存在し得ないはずであって、「体育」をさらに遡及することは自己矛盾である。他方、「現実」に正当性を求める立場では、過去の「体育」への言及は一定程度可能となるが、現状から抽出された意義での遡及になるので、再び同語反復的であることを免れない。根

拠が明示されていない立場も同様である。つまり、なんらかの一義性を求める立場では、体育の歴史的・個別的な事実を追求することも難しい。とりわけ以上の立場では、19世紀中葉以前の「physical education」の語史的事実は、必然的かつ完全に見落とされることになる。

実際、これまでの我が国の体育学分野では、用語的同一性に着目した「体育」史は、あまり語られていないように思われる。前掲木下の著作は数少ない事例であり、欧米での用例を対象としたものとしては、私見では、ほとんど認められない。我が国の「体育」の歴史が欧米からの移入によって開始されたことからすれば、それは欧米の「physical education」の歴史と連続的に捉えられるべきだが、現状では両者はいわば断絶された状態にあって、体育の用語史は、多くの部分が未知のままに留まっている。しかも、これまでの歴史的変遷を踏まえるならば、19世紀中葉以前の「physical education」の意義が、それ以降のものと同様であると見なせる先験的な根拠は認められていないのである⁷²⁾。

このような事情を認めると、派生的にいくつかの未解明の課題が浮上してくる。たとえば、我が国において「体育」は近代化の過程で求められ移入によって成立したが、「physical education」を最初に考案した欧米における事情はどのようなであったろうか。また、19世紀に我が国で成立した「体育」は、それ以前の100年の「前史」を持つ「physical education」史にどのように位置づけられるのか、そしてその固有の意義はどのようなか。また、我が国で体育が成立する際、「physical education」史の全体はどのように参照されたのか、あるいは参照されていないのか。

こうした疑問に答えるためには、とりわけ19世紀以前の「physical education」の歴史を、用語史的な観点から実証的に検証していくことが必要である。それは、我が国での「体育」の歴史を、欧米の「physical education」史に改

めて接続するものであり、前者を後者のブランチ branch として再定位するものであるだろう。体育哲学領域で見落とされているのは、このような研究課題の可能性である。

おわりに

以上、本稿では「体育とはなにか？」という問いを巡る議論のうち、とくに体育の自己同一性への関心を主題的に保持しているものを対象に、新たな基準による整理・分類を試みるとともに、体育に一義性を求める立場に共通する研究上の不備を指摘した。

事実として体育は、歴史的・社会的な文脈において多義的である。したがってなんらかの意義を正当化すると、他の意義が不当なものとして視野外に置かれることになる。これまで体育の歴史は、あらかじめなんらかの定義がたてられ、これに基づいて叙述されてきたが、この場合、他の意義での「体育」は捉えることはできない。もちろん、そうした歴史叙述にも一定の意義はあろうが、ある時代ある社会でどのように体育が捉えられていたか、といった歴史的・個別的な問題は見過ごされてしまう。「体育とはなにか？」という問いを巡る議論では、こうした点への関心が十分ではなく、歴史的事実の解明において研究上の盲点がある。本稿で指摘しなかったのは、このことである。

付記

本稿は、科学研究費助成事業（若手研究(B) 課題番号 25750269）の助成を得て行われた研究の一部である。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 大橋らは体育原理論の意義の一つに、体育諸科学において体系化への「統合原理」を提供すべきことを挙げている。大橋道雄編著（2011）『体育哲学原論』。不昧堂出版、

東京、pp.65-69.

- ²⁾ 近年のものでは、友添秀則（2009）『体育の人間形成論』。大修館書店、東京、などがある。
- ³⁾ 高田は、「体育の本質究明」と「体育学の基礎づけ」を主な対象とする研究領域を「体育哲学」と呼び、戦前にすでに「体育哲学」に関する研究が行われていることを指摘しているが、それを「萌芽」と位置づけている。高田哲史（2007）日本における体育哲学の学的形成に関する研究。広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 56：59-66。引用は p.60.
- ⁴⁾ 代表的な論者として高島平三郎（高島平三郎（2009）『高島平三郎著作集第3巻 体育原理』。学術出版会、東京）が挙げられる。同上高田（2007）をも参照。
- ⁵⁾ 大橋編著（2011）pp.35-37.
- ⁶⁾ 友添（2009）pp.70-77.
- ⁷⁾ 丹下保夫（1980）『新体育学大系第4巻 体育原理（下）』。逍遙書院、東京、pp.133-149.
- ⁸⁾ 中澤篤史（2013）なぜスポーツは学校教育へ結びつけられるのか。一橋大学スポーツ研究 32:13-25. pp.15-18 および pp.23-24（注5）を参照。
- ⁹⁾ 木下秀明（1971）『日本体育史研究序説』。不昧堂出版、東京。
- ¹⁰⁾ 城丸章夫（1980）『体育と人格形成』。青木書店、東京、pp.9-10.
- ¹¹⁾ 丹下保夫（1965）『体育技術と運動文化』。明治図書、東京、p.185.
- ¹²⁾ 中澤（2011）書評：友添秀則著『体育の人間形成論』。＜教育と社会＞研究 21：31-33。引用は p.32.
- ¹³⁾ 釜崎太（2012）体育原理論の系譜。日本体育・スポーツ哲学会シンポジウム「体育哲学を再考する（1年目）」、シンポジスト発表原稿、2012年8月18日、大阪大学中之島センター、

- p.4.
- 14) 佐藤臣彦 (1993) 『身体教育を哲学する』. 北樹出版, 東京, p.9.
 - 15) 佐藤 (1993) p.14 など.
 - 16) 佐藤 (1993) p.63.
 - 17) 佐藤 (1993) p.66.
 - 18) 前川峯雄 (1958) 『体育学原論』. 中山書店, 東京, p.124.
 - 19) 前川 (1958) p.170.
 - 20) 前川 (1958) p.125.
 - 21) 前川 (1958) p.112.
 - 22) 前川 (1958) pp.124-125.
 - 23) 前川 (1958) p.113.
 - 24) 高部岩雄 (1962) 『体育学原論』. 逍遙書院, 東京, p.149.
 - 25) 高部 (1962) p.149.
 - 26) 高部 (1962) p.149.
 - 27) 城丸 (1980) p.11.
 - 28) 城丸 (1980) p.11.
 - 29) 城丸 (1980) p.9.
 - 30) 城丸 (1980) p.10.
 - 31) 出口林次郎 (1965) 『改訂増補 体育学原論』. 東洋館出版社, 東京, p.2.
 - 32) 出口 (1965) p.4.
 - 33) 出口 (1965) p.2.
 - 34) 出口 (1965) p.3.
 - 35) 出口 (1965) p.2.
 - 36) 出口 (1965) p.3.
 - 37) 篠田基行 (1980) 『新体育学大系第 14 巻 体育思想史』. 逍遙書院, 東京, p.25.
 - 38) 篠田 (1980) p.23.
 - 39) 篠田 (1980) p.21.
 - 40) 篠田 (1980) p.24.
 - 41) 篠田 (1980) pp.19-20.
 - 42) 篠田 (1980) p.20.
 - 43) 永井康宏 (1983) 『体育原論』. 不昧堂出版, 東京, p.152.
 - 44) 永井 (1983) pp.150-151.
 - 45) 永井 (1983) p.10.
 - 46) 永井 (1983) p.10.
 - 47) 永井 (1983) p.10.
 - 48) 石津誠 (1969) 『体育原理』. 道和書院, 東京, p.10
 - 49) 石津 (1969) p.139
 - 50) 石津 (1969) p.172
 - 51) 石津 (1969) p.197
 - 52) 石津 (1969) p.198
 - 53) 石津 (1969) p.200
 - 54) 石津 (1969) p.9
 - 55) 石津 (1969) p.10
 - 56) 石津 (1969) p.10
 - 57) 阿部忍 (1985/1984) 『体育の哲学的探究』. 道和書院, 東京, p.5.
 - 58) 阿部 (1985 / 1984) p.3.
 - 59) 川村英男 (1990 / 1985) 『改訂 体育原理』. 杏林書院, 東京, p.12.
 - 60) 川村 (1990 / 1985) p.11.
 - 61) 丹下 (1965) p.185.
 - 62) 丹下 (1965) p.182.
 - 63) 昭和 22 年のものは「学校体育指導要綱」という名称が正しいが, 丹下の表記にしたがい, 「要領」と記載する.
 - 64) 丹下 (1965) p.181.
 - 65) 佐々木究・田井健太郎 (2013) 「体育原理論」の批判的検討－佐藤臣彦「身体教育を哲学する」に着目して－. 体育・スポーツ哲学研究 35 (1) : 21-29.
 - 66) 木下 (1971); 樋口聡 (2005) 『身体教育の思想』. 勁草書房, 東京.
 - 67) 佐藤 (1993) pp.181-183, pp.52-54 をも参照.
 - 68) 用例としては英語よりも仏語でのものが先行しているようである. 佐藤 (1993) p.181; 清水重勇 (1973) ルソー体育論の基本的性格をめぐって. 社会体育研究所月報, 1973 (6・7): 1-7; Vigarello, Georges (dirigé) (2005) “Histoire du corps – 1. De la Renaissance aux Lumières –”. Seuil, Paris; ヴィガレロ, ジョルジュ: 鷺見洋一監訳 (2010) 『身体』の歴

史Ⅰ．16－18世紀ルネサンスから啓蒙時代まで』。藤原書店，東京。なお，本稿では両言語での用例を同列的に捉えている。

- ⁶⁹⁾ 佐々木らの試みは数少ない例外の一つであるだろう。佐々木究・田井健太郎（2009）Jacques Ballexserd 著「子どもの身体教育についての論文：誕生から思春期まで」．体育哲学研究 39：49-54.

- ⁷⁰⁾ 前川（1958）pp.124-125.

- ⁷¹⁾ 体育原理論での歴史的叙述は，ある程度まとまったものとしては，たとえば佐藤（1993），出口（1965），篠田（1980），高部（1962）などに見られる。

- ⁷²⁾ 佐々木究（2012）「physique」と教育：ルソー著「エミール」に着目して．体育学研究 57（2）：399-414.

受付 2015 年 2 月 10 日

受理 2015 年 5 月 2 日